

# 『心理学における現象学的アプローチ 理論・歴史・方法・実践』 (アメデオ・ジオルジ著, 吉田章宏訳, 新曜社刊) 書評

渡 辺 恒 夫\*

Tsuneo WATANABE\*

本稿は、*The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Husserlian Approach*, by Amedeo Giorgi, UA: Duquesne University Press, 2009 の訳として 2013 年に出版された表題の単行本の評である。本誌に以前、「評者が専門とする心理学では、近年、主流である数量的実証主義の心理学の流れに対抗するかのよう、質的研究の影響が強くなってきていて、その科学哲学的背景として、解釈学・現象学への注目度も増している」<sup>1)</sup>と書いたことのある評者として、本書は待望の出版である。

じっさい、解釈学・現象学と並置した割には、現象学は一步遅れをとっていたのだった。解釈学はガダマールの解釈学的転回を通じて人間諸科学に滔々と流れ込んできている。ハイデガー哲学も、ドレイファス<sup>2)</sup>の『存在と時間』解釈を介して、看護・福祉学の分野で「解釈学的現象学的分析：IPA」という名の研究技法へと展開しつつある。フッサールの忠実な門人シュッツの現象学的社会学の影響下に成立したはずのエスノメソドロジーやディスコース分析といった潮流でも、メタ理論は後期ヴァイトゲンシュタインに取って代わられた感があり、しばしば激しい現象学バッシングが繰り返されたりする<sup>3)</sup>。海外の現象学的人間科学の学会に出ても、人気があるのはハイデガーでありメルロー・ポンティであって、フッサールは敬遠され気味だと分かる。フッサール現象学の用語は経験科学の徒には難しすぎるし、やさしい解説書があったとしても心理学の具体的問題に適用できる技法がなくては使いようがない。そう考えていた評者は、本書の原著が出た直後からこれに目をつけ、「自我体験・独我論的体験」という

テーマに適合するよう独自の技法的工夫を加え、『フッサール心理学宣言』<sup>4)</sup>という本を 2013 年早々に上梓したのだった。だから、引き続いて本書が、かねて現象学の先達として敬愛していた教育学者である訳者の手で日本の読者に紹介されたことは喜ばしい限りだ。

まず第 1 章での、「私は、経験主義が心理科学を基礎づけるための最善の哲学であるとは、信じていない。そこで私は、科学の現象学的理論が、より一層適切な心理学の発展を可能にするであろうということを示そう」(p.9) というマニフェストには改めて感銘を受けた。では(ここでいう科学とは人間科学を意味するが)、科学の現象学的理論の発展を阻んでいたものはないか。それは、現象学の二本の柱、超越論的還元と形相的還元を、具体的に心理学の問題に適用する技法がなかったからである。たとえば第 2 章では、ウィリアム・ジェームズやピアジェといった心理学以外でもよく知られた 7 人の心理学者を、計量的実験の心理学全盛期に質的研究を行った例として取り上げているが、これらの古典的心理学者は暗黙裡にのみ形相的アプローチを取っていたのに対し、「現象学は、形相的アプローチを明示的に活用する」(p.64)。そのための方法論を提供するのが、本書なのだ。

本書のかなめとなるのは第 5 章「現象学的方法」だ。まず、哲学としての超越論的還元に対するに、「科学的心理学の基準に合致するための修正」として「科学的還元」を以って替える。現象学哲学者がもつばら自己体験の反省に依拠してきたのと対極的に、科学的心理学では体験叙述データは研究者自身からでなく他者から得られなければならない。他者の叙述データでも、シュピーゲルベルク(『現象学事典』<sup>5)</sup>)の表記では“スピーゲルバーク”)に学んだ、身代り的に自己の経験として現前させて現象学的反省を行う方法が適用できる

\* 東邦大学/明治大学  
E-mail: psychotw@env.sci.toho-u.ac.jp

のだ。「もし、自分自身ではなく、他者に集中することを何故に選ぶのかという問いを提起するならば、それは、科学的研究の伝統の故にである。[……] 他者[の経験]を基礎に仕事をするのは、科学的研究の伝統への一つの譲歩なのである」(p.130)。

ここでこの「譲歩」という言葉が気になるが、とりあえず次の章に進んでおこう。第6章「方法の適用」ではいよいよ、形相的還元を心理学技法化した形相的アプローチが詳細に示される。ここでまず、ノエマノエシスに関する、心理学者にとってはやっかいな議論がなされる。心理学が求める(たとえば)嫉妬の意味(meaning)は、理念的・普遍的で個人を超越するノエマの意味(sense)とは異なるという議論である。哲学的考察は、嫉妬(jealousy)と羨望(envy)の間を鋭く識別し、「嫉妬が起こる時には何時でも、私に属していると私が見なしている何らかの事物が、喪失される危険に在る。……他方、羨望は、もともと誰か他の人のものである何らかの事物に常に向けられている。」(p.231)といった理念的の区分にまで達する。これに対して、「心理学とは、世界内の状況に押し付けられた、個人化され、主観的に解釈された意味の研究」(p.222)であり、「データが示すところでは、これら二つの情動[嫉妬と羨望]は一つの状況の中で、混同された仕方生きられる。……この発見は、他者、および自己についての感情が惹き起こされる具体的な状況においては、何故、これら二つの情動が混同されるのかという問いを惹き起こす」(p.232)ということになる。つまり、哲学としての現象学はノエマの一般化にまで達するのに対し、心理学としての現象学のめざすのは、「中範囲」(p.223)の一般化だということ。

しかしながら評者には、心理学的意味とノエマの意味をそれほど截然と分ける必要はないと思える。なるほどノエマの意味は、個人の経験を超越するという超越論的意味があるが、心理学者にとって超越論的問題というのはそれこそ問題外なので、拙書では<sup>4)</sup>、心理学徒にはハダシで逃げ出されかねないノエマ=ノエシスという用語は一切使わないことにした。形相的還元を用いてノエマの意味に相当する域にまで達する中範囲の一般化で留めるかは、心理学の範囲内で関心相関的に決められるとすればよいのではないだろうか。ノエマノエシスの議論は、哲学的超越論的現象学に対して心理学的現象学の領域を確保するための欠くことのできない議論に本書ではなっているが、評者は、後者は前者から超越論的問題意識を抜いたものだと、思い

切り単純化して説明することになっている。

蛇足だが、「形相」という言葉も、形相的還元の方法としてフッサールが唱える想像的自由変様による本質観取も、本書でも触れているように科学研究者にとってはなじみがないため、評者は上述の拙書では「体験の内的構造図解法」という方法を以って替えている。

この第6章では、「嫉妬」体験をそれぞれ二人の人物が叙述した原テキストから、嫉妬の心理学的意味を現象学的に取り出すための、数段階にわたる分析進行表が例示されている。分析者は著者本人に加えてもう一人。データも分析者も複数であるべきというのも、科学としての方法論的鉄則だろう。ただし、本書だけでは想像的自由変様のやり方が身に付くとは思えない。だからマニュアルが別途必要だということ。このあたり、技法論的整備はこれからの課題だろう。

けれども最大の問題は、分析進行表の途中段階で、原テキストが一人称で書かれている場合に三人称に変換するよう、指示されている点だ。これは、分析者による分析対象への不用意な同一化を避けるためと説明されているが、理由としては弱く、納得しがたい。ちなみに拙著では逆に、同様の分析進行表の中で、原テキストが三人称で書かれている場合は一人称に変換するという「一人称的読み」を、方法論的鉄則としたのだ(文献4, p.138)。これは、前出のシュピーゲルベルク<sup>6)</sup>も紹介している『ジャマイカの烈風』という小説中の挿話である、「自我体験事例エミリー」を分析していて痛感したことだ。作者の6歳時の実体験の投影であるこの挿話の原テキストでは、主人公エミリーに「そのとき突然、自分はたしかに自分だ(原文: She is she)ということが心にひらめいたのであった」という体験が生じるが、これは「そのとき突然、私は私だ(I am me)ということが……」と、一人称的に変換しなければならない(文献4, pp.44-46)。そうしないと、当のシュピーゲルベルク<sup>6)</sup>が発達心理学的調査の先駆者となった自我体験(“I-am-me” experience)にはならないからだ。また、エミリーは、この体験の結果、自分はどこにでもいる少女ではなく、世界で唯一の類例なき存在であるという「独我論的体験」にまで達してしまう。ここでも、他者の独我論は論理的に誤謬となるため、独我論的体験も、自己の体験として考察する他、意味ある体験として考察できないのである。他に、三人称変換すると意味が取りにくくなってしまふ体験として、夢体験があるだろう。

ここで、さきほど保留にしたのであるが、第5章に現れた「讓歩」という表現を、改めて問題にしなければならない。なぜなら、今日の質的研究の進展の中では、研究者が自己体験の叙述テキストをデータにするという、心理学者なら一度はひそかに夢見たであろう方法が、当事者研究や自己エスノグラフィーの名のもとに、開拓されつつあるからだ<sup>7)</sup>。つまり、「他者の経験を基礎に仕事をするという科学的伝統」に讓歩しなくとも済む方法があるのである。ここに、現象学的心理学の複数の可能性が示唆されているのではないだろうか。

一つは、もっぱら他者のデータを出発点とし、身代りの自己の経験として現前させて現象学的反省をしたのちに、再び三人称化することで(第6章にあるように研究者による不用意な同一化を避け)その客観性・普遍性を担保するという方法。もう一つは、自伝的当事者研究を中心とし、他者の自伝的データをも、「可能的自己」の体験として一人称的に読むことで、「自己体験」をいわば普遍化するという方法(この場合、他者が読んでその人の「自己」のこととして読める)。本書の著者、ジオルジは前者の途を選んだ。これは、引用文にあるような「讓歩」というよりは、科学の伝統からできるだけ離反することなく人間科学建設の王道を堅実に歩み続けようという「決断」とも受け取れる。なんといっても、経験主義・実証主義に反発するあまり反・科学的に響く言説をまき散らし、ついには自然科学者からの痛烈なしっぺ返しを食らうという<sup>8)</sup>、ポストモダン人文社会科学のおちいった陥穽を私たちは見て来たのだから。

本書は決して入門書ではなく、読みこなすにはフッサールをはじめとする現象学全般への最低限の知識を必要とする。その点、ダレン・ラングドリッジの *Phenomenological Psychology: Theory, Research and Method*<sup>9)</sup> という本など、フッサールからリクールにいたる現象学の歴史を前半で概説し、後半ではフッサールに基づくジオルジの心理学、ハイデガーに基づく解釈学的現象学的分析、そしてリクールに基づくこの著者創案になる批判的ナラティブ分析と、体系的に紹介しつつ具体的な技法論にまで及んでいて、現象学と心理学の全体像を把握するのに便利である。本書よりこちらの方が先に訳されていれば、本書の意義もよりはっきりしたのではないかと思われる。ちなみにこちらには、研究者自らが自伝的データを用いる方法についても言及がある(文献9, p.77)。最後になったが、科学研究者の端くれとしては、科学の方法論の意義とはそ

れに基づいてその科学がどのくらい研究実績をあげるかにかかっていると考えていることを付け加えて、本書評を閉じたい。

なおこの書評は、東京大学教育学部能智研究室内臨床心理研究会(2013年12月14日)での本書の読書会に基づいていることを付記しておく。当日の参会者には記して感謝の意を表したい。

## 文献

- [1] 渡辺恒夫『心身問題物語—デカルトから認知科学まで』(岡田岳人著)書評『科学基礎論研究』40(2), 59-60, 2013.
- [2] ドレイファス, H. L. 『世界内存在—「存在と時間」における日常性の解釈学』門脇俊介, 他(訳), 産業図書, 2000. (Dreyfus, H. L., *Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's "Being and Time, Division I"*. Cambridge, MA: MIT Press, 1991.)
- [3] たとえば, クルター, J. 『心の社会的構成—ウィトゲンシュタイン派のエスノメソドロジー』西阪仰(訳), 新曜社, 1998. (Coulter, J., *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*. London: Macmillan, 1979).
- [4] 渡辺恒夫『フッサール心理学宣言—他者の自明性がひび割れる時代に』講談社, 2013.
- [5] 木田元・野家啓一・村田純一・鷺田清一監修『現象学事典』弘文堂, 1998.
- [6] Spiegelberg, H.: On the 'I-am-me' experience in childhood and adolescence. *Review of existential psychology and psychiatry*, 4, 3-21, 1964.
- [7] エリス, C., ボクナー, A. P. 「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性: 研究対象としての研究者」デンジン, N. K., リンカン, Y. S. (共編)『質的研究ハンドブック3巻』平山満義(監訳), 北大路書房, 2006. (pp.129-164) (Ellis, C. & Bochner, A. P., Autoethnography, personal narrative, reflexivity. Research as subject. In Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (Eds.), *Handbook of Qualitative Research 2nd ed.*, Thousand Oaks, CA: Sage, 2001 (pp.733-768).
- [8] ソーカル, A., ブリクモン, J. 『知の欺瞞—ポストモダン思想における科学の濫用』田崎清明, 他(訳), 岩波書店, 2000. (Sokal, A. & Bricmon, J., *Fashionable Nonsense: Postmodern Intellectual's Abuse of Science*. NY: Brockman, 1998.)
- [9] Langdridge, D.: *Phenomenological Psychology: Theory, Research and Method*. Pearson/Prentice Hall, 2007.